

真田是著作集 第2巻 社会保障論 解題

岡崎 祐司（佛敎大学教授）

社会保障をテーマにした真田是先生の著書・論文は数多い。その時々々の政府の社会保障改革の動向に対して、数多くの論文を通して国民の側から鋭く批判し、運動の課題や展望を提起するもつとも機敏な研究活動を行ってきたのが真田先生である。また、理論的に社会保障とはなにかを追及した著書は、一九六六年の『社会保障―その政治と経済』汐文社が最初の著書であり、一九七一年の『現代民主主義と社会保障』汐文社、一九九〇年の『社会保障入門』労働旬報社（当時、現在は旬報社）、一九九八年の『社会保障論―二一世紀の先導者』かもがわ出版、二〇〇五年の『社会保障と社会改革』かもがわ出版と続いている。『社会保障と社会改革』は、真田先生の遺作ともいべき最後の著書である。

また、一九七〇年代後半から八〇年代初めにかけて、坂寄俊雄（立命館大学、当時）、角田豊（同志社大学、当時）、小倉襄二（同志社大学、当時）とともに、法律文化社から『選書 現代の生活と社会保障』総編集し、当時の若手研究者を含めて女性問題、労働者、健康・医療、高齢化・老人問題、障害者問題、地域問題、自治体のあり方、児童問題といった国民の貧困・生活問題と社会保障のありかたをカバーした全一〇冊の選書を刊行したことも研究史上に大きな意義をもっている。真田先生はこのなかで、『労働者のくらしと社会保障』、『貧困・生活不安と社会保障』、『地域のくらしと社会保障』、『社会保障とはなにか』の編者・執筆も直接に担当している。第2巻におさめた論考は、氏全体の社会保障論にかかわる業績の一部でしかないが、真田先生の社会保障論の発展と本質をとらえるうえで欠かせない論文であり、社会福祉論を含め研究の全体像や変化発展に迫る論考を含

んでいる。全体を「Ⅰ 基本的視点」、「Ⅱ 社会保障論の展開」、「Ⅲ 方向と課題」に分けた。「基本的視点」は真田先生の社会保障論の出発点であり、その後の理論化の基盤になっている論文、いいかえれば真田先生だからこそ論じられた社会保障論の理論的接近の諸論考である。「Ⅱ 社会保障論の展開」は、七〇年代の社会保障の体系的把握を試みた論考と、「構造改革」＝日本の新自由主義改革が本格化し、国民の側には労働の不安定化、地域経済の衰弱と貧困・生活不安の拡大が押し付けられたことが明確になった段階での、社会保障構造改革への批判と国民本位の改革への論点を明らかにした論考を収めた。そして、「Ⅲ 方向と課題」は、この分野では最後の執筆となった論考を収めた。

率直に言って、「Ⅰ 基本的視点」の諸論考は歯ごたえがある。資本主義の歴史と体制に関する社会科学の認識と社会政策論についての一定の知識が、内容を理解するうえでは求められる。しかし、社会保障論のその後の展開を方向づける基礎的論考として重要なものである。「Ⅱ 社会保障論の展開」はそれらを発展させ、社会保障を体系的に明らかにし、今日的課題に対する研究や運動への提起を含んだものである。そこで、「Ⅰ 基本的視点」の論考から真田先生の社会保障論の独自性がどこにあるか、社会保障研究へどのような貢献を果たしたかをみておきたい。なお、先生自身が社会保障論の研究の足跡を記した最後の「社会保障と社会発展・人間発達」をまず読んでからⅠ、Ⅱに進むと全体の理解の助けになるのではないかと思う。

「Ⅰ 基本的視点」の「社会政策論」(一九六六年)は『社会保障―その政治と経済』の一章で、真田先生が社会政策論争の成果として「政策主体」の理論的到達点を引き出し、後に自ら「三元構造」と定式化する社会保障の変動の構造を導き出す理論的解明の出発点に位置する論考である。一九六六年といえは「国民皆保険」(一九六一年四月)、老人福祉法、母子福祉法の公布、国民健康保険の世帯主七割給付など社会保障制度が国民に定着しはじめた時期である。

それにしてもなぜ、社会政策論争から出発する必要があったのか。同じ時期に与田柁(大阪経済大学、当時)も『社会保障』(ミネルヴァ書房 一九六五年)のなかで、社会保障論が社会政策論と歴史的にも学問的にも密接な関連をもつことは当然であって、前者は後者の伝統と理論を継承し敷衍拡大したものであり、社会政策の本質を「労働力保全」とする生産力理論では社会保障論を正しく把握することはできないとしている。与田氏と真田先生の問題意識はまったく同じではないが、戦前から戦後にかけて展開された社会政策論争をいかに乗り越えるかが、社会保障研究の重要な理論課題だったことは確かである。

ここでいう社会政策は今日この「Social Policy」(広義の福祉政策)ではなく、労働時間規制、賃金制度、労働環境、失業対策、労働者の社会保険など主に労働者対象の国家の政策をさす。この論争は社会政策の本質は総資本の立場からの労働力保全策であるという大河内一男(東京大学、当時)の理論を中心に、戦前からはじまり特に戦後の社会科学の発展を背景に、およそ階級闘争と国家の譲歩、国家と資本の関係をどう位置付けるかを巡って活発に行われた。真田先生は、この論争から社会保障を国家政策として位置づけつつも、国民の運動の影響と成果、制度化された社会保障の成果を今後の社会発展の展望にどう結び付けるべきか、その理論化を大河内理論の到達点と限界への批判から引きだすべく、大河内理論の「経済」と「政治」の内容を丹念に批判しながら探求している。真田先生は、社会政策論争は社会保障研究の出発点、前提としているが、この視点は社会福祉においても同様で『現代の福祉』(一九七七年)などでも、その成果と批判はしばしば使われている。

真田先生はこの論考で政策主体の概念を定立させ、経済法則的にみる資本としての合理性だけでなく、労働運動・階級闘争の力が国家から譲歩としての政策を引き出す経路を明らかにし、しかし資本主義国家としての政策の限界を厳しく指摘している。先にも述べたようにこの論考は真田先生の「三元構造」論の基礎となるものである。「三元構造」を図式的、機能的だとする批判もあるが、これは社会保障や社会福祉において史的唯物論の観点を付随する種々の条件や補足をそぎ落として定式化したものと理解できる。この定式が鮮明になるのは、次の「社会保障と民主主義」である。

第二の論考は『現代民主主義と社会保障』のなかの一章であるが、同書の「序章 社会保障の構造」では、前著を發展させて社会保障研究の基本的視点は「対象・運動・政策主体」の三つのカテゴリーの「階級的な力動関係」を正確に把握することが基本だと明確に述べている。なぜ政策主体（資本主義国家）が総合的・計画的に社会保障制度を確立するのが、独占資本段階の国家のありかたとして説明されている。階級闘争全体のみならずの社会保障運動について、その役割・特殊性はなにか、具体的機能はなにかについて言及している。もちろん「運動」のありかたは単に資本主義国家の譲歩を引き出すという観点だけではなく、確立された制度が資本主義の次の社会⇨未来社会への展望とどう結びつくのかを探ろうとしている。

この著書の刊行までに東京、京都で革新自治体が誕生し、のちに大阪府や主要都市で、それまでの開発型・住民管理型行政から教育・福祉重視・公害防止の住民生活優先型の自治体が誕生する時期である。自治体レベルではあるが、住民運動に影響を受けつつ福祉政策の立案・民主的管理が政治的に研究上も具体的課題になる時期である。真田先生が本書を『現代民主主義と社会保障』としている意味は、運動の重要性だけではなく、社会保障制度の民主的管理の問題にまで發展していることは、この論考をよく読めば理解できる。

ただし、当時の社会科学研究のなかで前提になっていた「資本主義の全般的危機論」がベースになり、福祉国家を資本主義延命のイデオロギーとして位置付けている。もちろん、これは真田先生だけではなく、マルクス主義研究の当時の弱点であったといってもよいであろう。「資本主義の全般的危機論」は、コミンテルン（共産主義インターナショナル）が一九二八年以降、資本主義の發展を経験しなかったロシアでの社会主義革命や世界大戦という情勢のなかで、資本主義が長期的で全般的な危機の時期に入っているとしたソ連中心の一面的認識である。確かに資本主義は構造的な矛盾を抱え社会問題を深刻化させるが、（一）支配階級が種々の危機に対して対策を講ずる現実をみず一歩事態が深刻化するというのは単純で、国内の階級闘争の力量や民主的發展の条件を無視したものであり、（二）なにより当時の社会主義といわれた国々が生産力の發展や国民生活、平和外交・軍縮

面でも、人権や民主主義の發展の面でも優位性をもつことはなく、まったく説得力のない議論であった。八〇年代後半には批判的に総括され、使われないようになった。

進んだ資本主義における發展する生産力を活かし、それを人権と福祉のために民主主義的に管理する能力をもった歴史段階になって、初めて未来社会を展望できるというマルクス主義の本質的認識からみても、「全般的危機論」はマルクスとはまったく無縁の議論である。そして、ソ連や東欧諸国は体制崩壊するのである。実は真田先生も後に、社会科学上の常識のように流通していた認識と規定を使ったことは、社会科学上の反省として今後に生かしたいと率直に述べている。

さて、「社会保障と民主主義」のなかでは、社会保障運動は「勤労人民の生活の社会化をおしすすめる役割をもっている」と勤労諸階層の生活から社会保障の公共性や展望示唆する記述がある。後に真田先生は、生活論すなわち「生活の社会化」や「生活様式」から社会保障を位置づけ、未来社会につながる理論的展望を志向して行く。この理論化は先生独自のものといってもよいであろう。「生活の社会化」と社会保障の関係は、『社会保障入門』、『社会保障論—21世紀の先導者』、『社会保障と社会改革』でも發展的に説明され展開される。

「社会保障における『社会』と『生活』」（『社会保障とはなにか』（一九八一年））は、この理論展開の基礎になる論考である。タイトル自体がいかに真田先生らしいこの論考では、「社会」として改めて社会問題・政策主体・運動の力動関係が理論的に整理され、政策主体による「対象の対象化」すなわち国民の側の権利論や生活論からいえば重大な生活困難として政策対象となるべき社会問題のうち、統治・支配の有効性や財政抑制、資本負担の回避の観点からあるフレームワークで切り取って政策対象がつけられることを明らかにした。運動はこの対象を拡大させることを、具体的課題の一つとして位置づけるべきことが明確化されている。

「生活の社会化」は、資本主義における賃労働者家族の典型的な生活として位置付けられているだけではない。社会保障制度の給付によって生活を再生産する生活様式は、未来の新しい生活様式を創りだすものであり、資本

主義の次の社会の展望につながる理論となつてゐる。生産諸力の発展、社会的分業と相互依存の深化は歴史的法則であり国民共通の基盤・条件が客観的には進行する。「生活の社会化」に沿つた社会保障要求は人間社会の発展を促進する作用力となる。真田先生が「社会保障は二世紀の先導者」とするのは、主観的願望ではない。史的唯物論をさらに生活論まで射程にいれて研究するなかで展望される必然なのである。これらのことは、『地域のくらしと社会保障』（一九七八年）の論考のなかでも、より詳しく論じられている。機会があれば、参照していただきたい。

「Ⅱ 社会保障論の展開」は社会保障の今日的課題、とくに一つを除いては新自由主義改革が進行するなかで著書の遺作である『社会保障と社会改革』を収めた。主観的な表現になることをお許しいただきたいが、この著作は読者つまり社会保障運動の担い手や初学者を意識して、社会保障の本質とその充実に確信をもつ理論を提示し、一方で改革と称して政策主体が強行する社会保障「解体」を鋭く警告し、現代に生きる人々の課題がどこにあるのかを明らかにし、考察の方向性をまとめている。いわば、次世代に課題はこれだよと、引き継ぎをまとめた著書であるように思えてならない。

私には病魔と闘いながら、渾身の力を込めて執筆している真田先生の姿が目につかぶようである。そして、社会保障や社会福祉にかかわるものが、未来社会を展望するうえでいかにそれらを位置づけ運動の方向性を見出すべきなのか、史的唯物論の科学的な目とヒューマニズムとロマンをもつて、歴史の発展を促進する主体となるようにと、次世代への遺言を込めた書であるように思えてならない。

あらためて繰り返す必要はないだろうが、真田先生の社会保障論は一貫して史的唯物論の観点から、すべての人々が人間らしい生活を実現するために、社会保障を追及したものである。それは、(一) 社会保障の歴史的生成と意義・限界を明らかにし、社会保障の理念・制度・方法など全体を明らかにすること、(二) 社会保障の歴史的政策主体・運動の力動的関係のなかで政策主体の性格の解明と社会保障運動の歴史的任務を明らかにすること、

(三) 「生活の社会化」という資本主義の生産諸力の発展にともなう作用が民主的な未来社会の社会保障の条件と準備をつくること、そして(四) 社会保障を歴史的発展の促進者にするはなにより勤労国民であることを明らかにしたこと、ここの独自性と研究上の貢献がある。

さて、「Ⅲ 方向と課題」には「社会保障と社会発展・人間発達」を収めた。先にも述べたように、ここには真田先生自身が社会保障研究の軌跡を語っている。私は先に、『社会保障と社会改革』が先生の遺言ではなかったのかといった。しかし、この論考を読むとまた違う感想をもつてしまう。社会保障論に社会理論だけではなく人間発達を含めた人間論が求められるとか、社会保障がどのような人間を育てる可能性を備えているのかというテーマの提起は、明らかにこれまでにない新たなテーマの提案である。社会保障の定着が人間に与える影響の三つの段階は、「自身のための覚書」として付け加えるのだとしている。真田先生はさらに、主体形成の問題を人間論として探究し、次の社会保障論の著作を構想しようとしていたのかもしれない。

解題として、わたしは改めて真田先生の理論的軌跡と発展を追うために、本書に収めた著書・論文以外にも含めて社会保障に関する業績に目を通して見たが、自分への研究上の引き継ぎや遺言はどこにあるのかと、主観的な意欲を強くもつて読み込み過ぎていたのかもしれない。「そりや、君、すべて引き継ぐ必要はないが、エッセンスを汲み取って、自分なりに理論を発展させりゃいいんだ。」先生なら、そういわれるのではないかと思う。

この第2巻を手にした読者が、社会保障の発展の担い手としての立場で真田先生の理論的成果を引き付けて咀嚼していただければ、この上ない喜びである。